

第2章 歴史主義の時代におけるチェコ「国民」の自己表象

篠原 琢

はじめに

「チェコの言論は甘い歓喜に酔いしれて、独特の粘り強さで全精力を傾けて人々の間に熱狂の種をまこうとしている。かわいそうな人々は、今のところおとなしく指導者についていくが、休むいとまもない。今日が大いなる祝祭の日だとすれば、明日にはそれについて大げさに、高ぶった調子で書き立てられることだろう。そこにはチェコ人が次のお祭りでなにをしなければいけないか、もうほのめかしてあるし、実際そうすることになるのだ。…5月22日には橋の聖別式、30日には国民博物館の50周年記念、6月はじめにはパラツキーの誕生祭、6月末にはチェコ体育祭、そうしてきりが無い。アソシエーション、ギルド、学生や労働者たち、つまり祭典の参加者すべてが『国民的祝祭日』のずっと以前から準備をしてきたことを考えれば、これは人々の幸福の妨げになるものではないにしても、有益でないことはわかるだろう」¹。

1860年代のボヘミアについて、このような感想を記したのは、チェコ国民運動については常に敵意か、そうでなければ皮肉なまなざしを向けていたウィーンの自由主義者たちばかりではない。1862年にすでに『プラハ新聞』もこう論評している。

「祖国中に、なんとたくさんのお祭り！祭典に祭典が続き、その理由にはことかかない。愛国的な遠足、集まり、お祭りのすべてに参加しようと思うなら、常に旅をしていなければならない。祭典の主催者には、このことは文字通りあてはまる。…今年行われた祭典、計画されている祭典を数え上げれば、読者諸兄をうんざりさせるだけであろう。さらに疲れを知らぬ主催者たちは、おせっかいにも来年、どの町で、いつ誰を祝うのかももう決めているのである」²。

かのマーチェイ・ブラウチェクもまた、二十数年後にこう述懐している。

「ボヘミアには有名な人物があまりにもたくさんいるので、心からの拍手喝采、あれやこれや

¹ *Die Presse*, 14. 5. 1868. この記事は、ボヘミア国民劇場の定礎式を前にして書かれたもの。なお、「橋の聖別式」とは、プラハ市に架けられた第三番目の橋の竣工式を指し、「体育祭」とは、体育団体「ソコル」の大会のことである。

² *Pražské noviny*, 2. 10. 1862.

の何周年記念祭、祝宴、その他もろもろのありがたいことのために、私たちは自由な時間のほとんどを捧げるほどだ」³。

たしかに1860年代からのほぼ20年ばかりのあいだ、チェコ社会は「祝祭狂時代」といってさしつかえないような時代を経験する。1868年5月17日に行われたチェコ国民劇場の定礎式は、スメタナの歌劇「リブシェ」で現実にこの劇場が柿落としをした1883年11月18日よりも、大きな社会的事件としてチェコ国民史のなかに記憶されている⁴。1881年、「ヴルタヴァ河畔の黄金の伽藍」は完成を目前にしながら失火で灰燼に帰した。柿落としはそれを乗り越えてようやくこぎつけたものだった。一方、定礎式後、財政難から劇場建設はすぐには着手されず、着工はようやく1877年になってからのことである。にもかかわらず、国民史の記憶のなかで、定礎式の意味がより大きいとするならば、その象徴性と「祝祭狂時代」の時代的特質はいっそう際立つであろう。チェコ語のメディアは、数々の「国民祭典」の準備について詳細な報告を行い、祭典の後には、それが国民社会にとってもつ意義を盛大に論じ、国民史のなかに位置づけてみせた。地方で行われたどんな小さな「国民祭典」も「通信員」または読者の手によって、新聞紙上で報告された。「国民祭典」は、第一級の社会的事件として扱われたのである。もちろん、ことはチェコ社会に限らない。ドイツ諸邦では、すでに1830年代ごろから、「国民祭典」が創造され、1859年の「シラー記念祭」でそれは一つの頂点に達していた。ハプスブルク帝国内では、ドイツ語メディアに依拠する自由主義者たちを中心として、「黒赤金」の国民祭典が受容され、組織されていた。ボヘミアでは、チェコ社会の祭典とドイツ社会の祭典が相互に競合し、互いに引用しあいながら、対抗していた。ここでは、このような「祝祭狂時代」の歴史的な位置づけをはかることとする。

1. チェコ語公論の成立

19世紀前半の「国民再生」(Národní obrození)といわれる過程は、「チェコ国民」という主体を、記号として構築しようとする努力であった⁵。スラヴィズムはその端緒にあって、「チ

³ Svatopluk Čech, *Nový epochální výlet pana Broučka tentokrát do XV. století*, Praha, 1888. Státní pedagogické nakladatelství 版 (Praha, 1960), p. 8 から引用。プロウチェクは、スヴァトプルク・チェフの造形になる主人公で、19世紀のチェコ市民を風刺的に写している。

⁴ 定礎式の50周年は、1918年にあたり、チェコスロヴァキア建国後、盛大に想起された。次を参照：*Založení Národního divadla 1868. Vydáno na paměť padesátého výročí 1918*, Praha, 1918.

⁵ Národní obrození ということばは、同時代的には、当然のことながら、歴史の実体としての「チェコ国民 český národ」の存在を前提としている。実体論的、本質論的な認識をそのままに踏襲する場合、この語はしばしば「民族再生（あるいは復興）」と訳されてきた。しかし、この過程を近代黎明期の文化・政治現象と考え、*národ* をそこで生みだされた質的に新しい表象であることを強調するため、ここではこの語を一貫して「国民」と訳すこととする。このように訳すと、同時代的な含意を必ずしも反映しないことがあるが、それは本質論的な意味生成に対して異化作用を及ぼしたいからである。

ェコ国民」が属する「種族」の歴史的な古さと地理的な広がりを表象すべきものであり、この時代に生みだされた文芸、歴史叙述、言語学、民俗学、あるいは地理学は、「チェコ人」が、ヨーロッパのなかに文明性と歴史性をもった「国民」として存在することを表象する記号体系を創造することに従事したのである⁶。この過程に参加したのは、非常に狭い範囲の「愛国者」(vlastenci)といわれる人々であった。この人々のあいだに共有された、「チェコ国民」を表象する記号体系は閉鎖的であり、この体系によって世界認識がなされた。またこの人々は、自らの身振りや、個人的関係性すらもこの記号体系に従属させた⁷。この過程は、文人 (literát) や知識人たちの「文芸共和国」の公論のメディアとして、チェコ語を再創造する過程であり、このなかで、世界の事象を充足的に表象し、認識する語彙とコンテクストとを準備する努力であった。19世紀のボヘミアの現実では、それは、ドイツ語をメディアとする公論の場から、チェコ語の社会が分離する過程でもあった。実際、「愛国者」となった知識人たちは、ドイツ語でみずからの教養を形成していたのである。

「愛国者」たちが構築した「チェコ国民」は、彼らの狭いサークルをこえて、主体的な市民からなる市民社会という場を用意すべきものであった。しかし、元来開かれたものとして構想された公論の空間は、ここではチェコ語によって構成される文化規範一般を内面化した者だけに開かれており、そこには明らかな境界がはじめから設定されていた。公論空間の持つ開放性

「国民再生」期については、ミロスラフ・フロホの国民形成の「三段階テーゼ」に触れておかなければならない。フロホによれば、近代の国民形成は、言語・歴史・民俗研究、文学作品などを通じて、狭いサークルの知識人の間で、国民文化が再発見、再創造される段階 (A段階)、そこであげられた成果が知識人サークルの外の人々にも流通する段階 (B段階) を通して、大衆的な国民運動が展開する段階 (C段階) に至る。チェコの場合、啓蒙期から1830年代までがA段階、1840年代までがB段階、そして1848年革命以後の時期がC段階とされる。「国民再生」期は、狭義にはA段階に相当する。フロホのテーゼの革新性は二つの点にあった。第一は、ロマン主義的な「国民再生」論に対して、国民形成の段階論を示すことによって、この過程が持っていた階級的偏差、地域的差異を明らかにすることを可能とし、比較の視点を開いたことである。第二は、チェコの例では、「国民再生」文化の担い手が、都市的な背景を持った知識人であり、B段階におけるその受容者も都市の小商工業者を中心としたことを明らかにした点である。19世紀以来、ロマン主義的な把握では、「国民文化」の「健全な」担い手として農民が想定されており、農村の民衆のなかに「保存された国民文化」が、発見・再生される過程こそが、「国民再生」である、とされていた。これはそれに対する根本的な批判であった。フロホは、国民形成を近代の社会経済的変容の必然的な一部分ととらえた (封建制から資本主義、市民社会の形成へ)。しかし、フロホのテーゼは、1990年代以後の文化史的なナショナリズム研究の急速な進展からすると、国民形成の段階的必然論に見える。近代的「国民」の前段階として、文化的民族集団 (etnikum) を想定する点では、アンソニー・スミスに近く、フロホ自身の論調も、1990年代には「近代主義者」への批判を基調としている。Miroslav Hroch, *Die Vorkämpfer der nationalen Bewegung bei den kleinen Völkern Europas*, Praha, 1968; Idem., *Social Preconditions of National Revival in Europe*, Cambridge U.P., 1985; Idem., *Na prahu národní existence*, Praha, 1999; Idem., *V národním zájmu*, Praha, 1999.

⁶ 「チェコ国民」という主体、「チェコ語」と「チェコ文化」の価値を表象する、という機能がもっとも重要なものであって、事実性は、ここでは二次的である。コラル、ユングマンなどのチェコ語論に対するマツラの分析を参照：「さまざまな現象に対して、恣意的な特徴づけがなされる、ということは、事実の重みに対する感覚が希薄であることに照応している。またこのことは、重要視されるのは機能であって、事実そのものではないこと、再生期のテキストにおいては一般に、真実性とは、非常にしばしば客観的な内容によってはかられるのではなく、その文脈で客観的な内容のもつ機能、その目的性にむすびつけてはかられるのである」(Macura, *Znamení zrodu*, Praha 1995, pp. 34-35.)。意図的な誤訳、偽造、神話化もその機能の本質的な一部分であり、「再生期」の著述をその点から批判することはできない (*Ibid.*, pp. 110 ff., 61 ff.)。

⁷ Vladimír Macura, *Český sen*, Praha 1998, pp. 168-182.

と閉鎖性の矛盾は、歴史的には「市民社会」が「国民の社会」として成立した経緯からすれば、より普遍的な問題として考察できることだが、ボヘミアのチェコ「国民社会」の場合、その成立がドイツ語を媒介とする公論空間からの分離として展開したために、閉鎖性の側面がより強くあらわれることになった。市民社会の構想と密接にむすびついた19世紀の国民観が、歴史性と文明性とを備えた公の文化の同化力を確信することによって開放性と閉鎖性の矛盾を回避していたのに対して、「チェコ国民」は、非公式文化として私領域に囲い込まれることに抵抗し、同化することのできない独自の主体として表象されたのである。それだけにいっそう、国民社会の内側にあつては、現実はともあれ、公論の場は、社会階層・身分的には無条件に下に向かって開かれていた。「愛国者」たちは、「チェコ語」と「チェコ文化」の文語的伝統よりは、その平民性を強調し、「田園としての農村」は、重要な記号として機能した。その結果、主体としての「国民」の所与性が強調される分、市民社会が前提としていた構成員の主体性という側面は後景に退くことになった。

2. 「再生期の文化」の社会化・政治化

「チェコ国民」を表象する記号空間が、いかにして社会化されたのか、国民祭典の分析はその一端を明らかにするものでなければならない。「祝祭狂時代」はまさに「再生期」の文化が社会化される、その端緒にあたるものだからである⁸。そこで問題となるのは、文化の型の問題として考えるならば、社会的に共有されるべき「国民的な」表現形式の創造であり、人々にとって理解可能な記号体系の再編成である。社会的な問題として考えるならば、祭典の組織の編成、動員であり、現実的利害との調整であり、祭典が持つことになる政治的含意である。国民祭典の準備と実行が、社会的な実践である以上、二つの側面は切り離して考えることはできない。新たに創造された表現の形式は、相互に矛盾するさまざまな意味を生みだすことができたし、祭典に明示された記号体系は、地域社会の紛争、経済的利害を表象するものとして機能することもありえたのである。「再生期」の文化が、「チェコ国民」という主体を表象する記号体系を構築したとするならば、それは市民社会の政治的・社会的課題をどのように表現しえたのか、

⁸ 「チェコの『再生期』盛期の文化的産物は、強くこの語本来の意味で『記号的』である。記号が仲介するだけではなく、何よりもこれが表象し、代用する。別の言い方をすれば、チェコ文化の現実とはその初期の段階では必然的にテキスト外的なものであるよりテキスト内的なものであった。文化的産物そのものによって形づくられる社会状況の像の方が、その文化的産物が産み落とされる現実の人間関係、社会的絆そのものよりはるかに生き生きとしており、より完全なものであった。…チェコのユングマン文化が現実化するプロセス、本来の意味での『再生期』の克服の過程では、ユングマン文化のテキスト作品よりはずっと演劇に依拠することができた。当初の段階では、ユングマン的コンセプトによるチェコ文化の遊戯的性格、現に社会的である文化よりは、『文化で遊ぶ』ことが、制度としていずれにせよ『現実的』である演劇と対立する関係にあったとしても、チェコ文化が徐々に現実化されるなかで（テキストからリアルなものへ、制度的なものとしての確立、社会関係の発展、愛国者サークルの社会化、愛国的プログラムへの幅広い社会基盤の獲得）、両者が接近する可能性が生じてきたのであった」（Macura, *Znamení zrodu*, p. 198.）。

また、現実の課題のなかで、どのような意味作用をおよぼしえたのか、そのことが祭典の分析を通じて明らかにされなければならない。

「愛国者の社会」がはじめて社会的・政治的実践をせまられたのは1848年革命期のことである。1848年革命は、立憲革命と社会革命の複合革命であった。「愛国者」たちは、「チェコ国民」という主体を、現実の政治的文脈のなかで構築する必要に迫られた。一つは、世襲隷農制の廃止にあたって、身分制社会から市民社会への転換をどのように構想するかという問題があり、もう一つには、ハプスブルク帝国のみならず、広く中東欧地域における国家再編という課題があった⁹。当然、それに応じて政治的同盟者をどこに求めるか、という生々しい問題があった。重要なことはそうした課題について、論議する公衆があらわれ、チェコ語がそのメディアとして機能したことであった。革命期に叢生した新聞は、チェコ国民を主体として語る語彙と文脈とを用意した。とりわけ1840年代から『プラハ新聞 *Pražské noviny*』の主筆をつとめ、革命期に『国民新聞 *Národní noviny*』を主宰したカレル・ハヴリーチェク Karel Havlíček の活動の意義は大きかった。ハヴリーチェクは、教理問答（カテヒズム）や行商歌の形式を援用して時評を行った。これは「再生期」の文化に蓄積された記号を、従来の言表形式にのせて社会化しようという試みであり、ジャーナリズムの言語の模索であった¹⁰。もちろん、こうした「再生期」の文化の社会化、とってよいような事態は革命期に突然出来たのではなく、ボヘミア博物館、工業者連盟、市民クラブ (*Měšťanská beseda*)、マチツェ・チェスカー (*Matice česká*) といったアソシエーション活動のなかで、1840年代には徐々に準備されていたものである。革命はそれを劇的に促進した。

1848年革命期には、たしかに19世紀後半から20世紀にいたる帝国の再編問題、とりわけ「国民」という政治的主体の問題が、ほぼすべて基本的なカタチであらわれた。しかし、「再生期」の文化の社会化という観点から見ると、1848年革命は、何らかの起点あるいは断絶点とみるよりは、一連の流れの中に見るほうが自然である。ただし、革命のもたらしたものは、この後の展開に決定的な影響を与えることになった。とりわけ隷農制の廃止は、市民社会の形成にとって不可欠な前提であった。それにともなって領主の司法・行政権も廃止されたが、地域の行政権力を再編するために導入された自治体は、以後、アソシエーション活動とともに、公論の場が拡大するにあたって基礎的な柱となった。1851年の「シルヴェスター勅令」によって、1848年革命の政治的成果のほとんどが否定されたが、1850年代を通じて、この過程は緩慢に進行していった¹¹。

⁹ この問題について詳しくは、篠原琢、「マサリクと『新しいヨーロッパ』—主体としての『国民』と『中央ヨーロッパ』の多様性—」、『地域と地域統合の歴史認識』、北海道大学スラヴ研究センター、「スラヴ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯 No. 74, 1998年3月、6-16頁を参照。

¹⁰ 行商歌 (*Kramářské písně*) は、19世紀前半まで、できごとの伝達・報道形式としても有力なメディアであった。

¹¹ Otto Urban, *Česká společnost*, Praha 1982, pp. 100 ff.

3. 「国民祭典」の意義と機能—分析の視角—

「国民」が「文芸共和国」の言説から離れて、社会的・政治的な実体として、また歴史的に連続性をもった実体として存在することを表現するためには、第一にそれを文化的に了解することを可能にするような表現形式が必要であり、第二に「国民」を表象する記号体系が必要であった。「国民祭典」は、その誕生に本質的にかかわっている。それは「再生期」の文化が、祭典の組織化、祭典への動員を通じて社会化されるための制度であったのと同時に、組織化、動員を可能にするための表現形式、記号体系の模索の過程でもあったからである。ここで注意しておかなければならないのは、「文芸共和国」における儀礼とはことになって、「現実」の組織、動員にあたっては、「再生期」の文化が持っていた記号体系について同一の解釈を期待されたわけではなかったことである。シンポジウムでの報告では、1860年代に行われたいくつかの国民祭典をとりあげ、その機能、形式の創造を具体的に分析したが、ここでは、その際のアプローチについて概括的に論ずることとする。

「国民祭典」を論じる際には、ここで創造され、援用される文化的型、言表形式が問題となる。言表内容としての国民的イデオロギーは二義的な要素でしかない。つまり、「祭典」の主催者が考える祭典の目的、祭典の意味が参加者たちにどれだけ共有されたのか、はたして共有されたのかどうかは、ここでは問われない。「祭典」を何らかの「民族意識」の発現、国民的「アイデンティティ」の表明、政治的示威行為と見る視点では、主催者の意図が参加者に理解され、共有されているということが、論証なく前提とされている。先に触れたM.フロホのテーゼでは、B段階からC段階への移行を、ナショナリズムの大衆化と定義し、その要因として、コミュニケーション手段が発達したことや、広範な人々が社会参加の可能性を拡大したことに求めているが、このようなシェーマは、ナショナリズムの受容に親和性のある住民集団を前提としている（チェコ史学ではこれを *etnikum* とする）。しかし、ナショナリズムの創生、発展は、このような一方向的なメカニズムではありえなかったし、創造されたナショナリズムに親和的な住民集団をあらかじめ想定する根拠は薄弱である。

「国民祭典」の主催者の意図と参加者の意識とに乖離があると仮定する場合には、祭典における意味の対抗と統合との複雑な関係を論じなければならない。言表形式は基本的に言表内容に恣意的に対応しうるものであり、問題となるのは、「祭典」において創造された文化的な型がどれだけ人々に共有されえたのか、そして日常生活において応用されえたのかということである。史料研究の問題としても、祭典の参加者の「意識」を実体的に問うことは不可能である一方、文化的型の由来、機能、応用について論証することは可能である。

「国民祭典」の準備、実行過程では、さまざまな「国民的形式」が創造された。この文化的型の創造にあたっては、「横領」*appropriation* という概念が有効である。エリート文化の民衆文化への転移、民衆文化の文脈における意味、機能の変化を問題化したこの概念は、民衆文化（民俗文化）、貴族文化、都市文化や宗教的表象の国民文化への援用を分析するのにも有効であ

る。「国民再生」期には、「チェコ文化」の記号体系を創造するにあたって、ドイツ語をはじめとするさまざまな文芸作品、学術的著作が、チェコ語に「移植」(transplant)された。「異郷の植物をわが故郷のものとする」というモットーは、この間の翻訳戦略を雄弁に物語っている。

「愛国者」のサークルにおいては、このような知的な横領が、「チェコ文化」を創造する一つの核となったが、国民文化が社会化される過程では、人々が社会的に実践しうるような文化の型が要求されたのである。

再生期の「愛国者」たちは、イデオロギーとしてバロック文化を拒否した。「ビーラー・ホラ以後」は、「チェコ文化」が失われた時期として、「眠り」、「死」、「暗黒」といった比喻で語られた。それに応じて、19世紀は、「覚醒」、「再生」、「光明」として自覚されるのである。「愛国者」たちは、この点で、啓蒙思想の申し子であった。啓蒙期に「(宗教的)迷妄」、「狂信」、「陶醉」といったことばで批判されたバロック文化は、「愛国者」の文脈では「チェコ文化」の抑圧、喪失として語られたのである。しかし、国民文化の創造にあたっては、バロック期に発達したカトリック的愛国主義は一つの大きな源泉であった。とりわけ、国民祭典における文化的型は、バロック期の宗教的・身分的儀礼に大きく依存している。国民的形式が人々に共有されるためには、よく知られた、了解可能な型が援用されなければならなかったのである。この点で、19世紀のチェコ・ナショナリズムは、内容においては啓蒙主義とロマン主義に淵源を持ち、形式においてはバロック文化を継承しているということもできる。

こうした事態は、しばしば形式とそこに配置された国民的記号との矛盾を呼び起こす。バロック的な祝祭形式に依存しながら、国民的記号を配することによって意図された新しい意味作用は、バロックの宗教性を全面的に否認するのである。たとえば、「マリアの奇蹟」への感謝を表現してきたビーラー・ホラへの巡礼は、国民再生期のころから、国民的殉教を記念するものと位置づけられはじめたが、にもかかわらず、巡礼の形式はそのままに踏襲された。このような矛盾はしかし、ジャーナリズムのことばによる統合的な叙述に服することで、存在しないものとなった。国民祭典の意味を国民史、国民社会のなかに位置づけるために、チェコ語のメディアは、「再生期」以来蓄積された表現法を最大限に駆使した。もちろん、新聞の発行者や各地の通信員は、祭典に積極的に関与したし、新聞・雑誌は、準備状況を知らせる告知板としての役割をになった。しかし、何よりも、混成的な表現形式に依存して実現した祭典に、統合的な解釈を与える、という点で、ジャーナリズムはできごとの本質的な一部であり、できごとの外に立ってそれを報道する、という機能は望ましいものとさえ考えられていなかったふしがある。ドイツ語メディアとチェコ語メディアとが競合する状況にあって、このようなジャーナリズムの性格はいっそう際立つことになる。

国民的形式が拡散、日常化するにあたって重要な要素の一つは、国民的記号の商品化である。国民祭典は多くの場合、商業的にも成功しなければならなかった。ロザリオ、聖像画などにかわって、巡礼や祭典では、国民的アイコンが販売され、関係する業者は、行事に関係する商品の独占販売権を競った。また祭典に参加する場合の「然るべき国民的服装」も、民俗的日常にモ

デルがない以上、商品化された形態に倣わざるを得なかった。こうして購入された「国民的服装」は、地域の儀礼にも応用されたのである。祭典が大規模なものである場合、鉄道会社は特別列車を割引価格で提供したため、国民祭典にはより多くの人々がより遠方から参加しえた。これも、バロック期の祭典に比して、国民祭典に新しい質をもたらした。

終わりに―「国民」をめぐる文化戦略

さて、国民的形式（文化的型）を別個に扱うアプローチをとることによって、祭典参加者の解釈の戦略を問題にすることができる。身分制下でさまざまな範疇の下にあった人々は、国民的形式を応用することによって、みずからの社会的再定義をはかった。身分による社会的定義を、国民社会における「市民」としての定義に変換しようとしたのであり、それを表現するための文化的型が必要とされたのである。「市民」としての定義は、一方で均一なものとして表現されながら、「市民」ならざる「他者」の表象を不断に必要とした。「市民」に対する「農奴」、「文明社会」に対する「野蛮」、「威厳・誇り」に対する「卑屈」、「独立」に対する「依存」、「教育」に対する「蒙昧」、「勤勉」に対する「自堕落」、その他その他、あらゆる二分法のもとに、「市民」ならざる「他者」が表象された。そのため、均一な同胞の共同体として表現される国民社会は、現実には排除と差別を再編成するものであった。また、身分制下での表象に比して、「市民」の表象は強くジェンダー化されている。

「市民社会」の構想は、国民的な表現形式が意味作用を及ぼす上で、これを統制する上位言語として機能した。もちろん、先に述べたように、形式と意味とは、しばしば恣意的に対応し、国民的形式は非常に混成的ではあった。しかし、さまざまな日常生活の場面での社会的再定義は、「市民」への転成という非常に強いモチーフを持っており、国民的形式は、それを表現する戦略として積極的に援用されたのであった。国民的形式が具体的な日常生活の各場面に応用されるにあたって、「市民社会」のエトスがいかに本質的であったかは、別にくわしく論じられなければならないだろう。